

## 「万葉植物文化誌」補足2

平成二十二年六月十五月初版

るヒガンバナの白花品種を詠ったものと説明され、これも科学的根拠から一理あると認めざるを得ない。

以上、今日では「いちし」ヒガンバナ説は半ば定説とされるほど一般にも広く浸透しているが、ヒガンバナは死人花（しにびとばな）などの方言名が示唆するように、日本の伝統的植物文化とは全く相容れない存在であることも否定しがたい事実である。にもかかわらず、それが「いちし」という植物の基原考証の過程で議論の俎上に挙げられることはなかった。このような状況にあつて、ギシギシ説の唯一の弱点というべき花の地味さに対して、古今の花に対する審美眼の違いによつて説明できるのではないかと考え、ヒガンバナ説に対する反駁の機会を期して本書の上梓後も考証を継続したのであるが、思わぬところから手掛かりを得ることとなった。本書補足「わらび」の条で、筆者は万葉時代のみならず平安・鎌倉時代にあつても「わらび」はイノモトソウ科ワラビではなくゼンマイ科ゼンマイおよびその近縁種の可能性の高いことをいくつかの和歌の情景分析から明らかにした。「いちし」は顕花植物であり、シダ植物である「わらび」とは植物学的に類縁性は全くないが、それは近代科学の洗礼を受けた現代人の先入観に基づく認識にすぎず、古代から近世に至るまでの日本人は全く無垢の心情から思いもよらぬ感性でもつて花を認識していたことがわかったのである。

■ギシギシの花は地味にあらず？（七六〜八一ページ）

【補足】「いちし」はヒガンバナ説（牧野富太郎ほか、エゴノキ説（白井光太郎、クサイチゴ説（仙覚ほか、ギシギシ説（順徳天皇『八雲御抄』、ダイオウ説（梨神『代匠記精選本』賀茂真淵）の各説があり、本書ではこのうちでギシギシ説を支持している。和漢の本草学との整合性を重視してこの結論に至つたのであるが、牧野富太郎ほか多くの識者が批判してきたことであるように、「いちしろく」とおよそそぐわなない地味なギシギシの花が本説の最大の弱点とされてきた。実際、平安時代の歌集に眼を投じれば、『新選和歌六帖』に「しるべせよいちしの花の名にし負はばまたうへもなき道の行くへを」とあり、確かに「いちし」の花は平安の歌壇において「名にし負ふ」に値するとされてきたことは疑いの余地はなく、古典文学で明確に呈示された植物観としてこれを否定するつもりは毛頭ない。一方、「立つ民も衣手白し道の辺のいちしの花の色にまがへて」（木抄 光明峰寺入道遺家）で示唆されるように、「いちし」が白い花をつけることはヒガンバナ説の弱点であつたが、稀ながら野生品の存在が知られ

吉野山 散りしく花の （したわらび） 下蔵 桜にかへて 折るものうし

（壬二集 藤原家隆）

この歌は、補足「わらび」でも紹介したが、これまでの国文学の解釈では散りつつあるサクラの花に代えてただ山菜の「わらび」を折る云々となつて、いかにも釈然としないものとなつてしまつが、それは無理からぬことであり、蕨をワラビとすればそう考えざるを得ないからである。補足「わらび」で述べたように、万葉時代から江戸以前までの「わらび」

は今日いうゼンマイを指すのであり、いわゆるワラビを含めてほかのシダ植物にないゼンマイ特有の形質を考慮すると、この歌の解釈は劇的に変わってくる。『大和本草』(貞原益軒)に「ゼンマイニ花アリ」、『本草綱目啓蒙』(小野蘭山)に「ゼンマイは花穂ヲ出ス」とあるように、江戸時代を代表する本草学の泰斗もゼンマイは花をつける」と明確に認識していた。ゼンマイは、栄養葉と称する通常の枝葉に相当するもののほかに、熟すると赤褐色に色づく胞子葉を出す(下段の写真)。花をつけないはずのゼンマイにおいて、益軒・蘭山をして花と錯覚せしめたのはこの胞子葉だったのである。平安の歌人も同様な認識をもっていたとすれば前述の歌は、散りつつあるサクラの花に代えてゼンマイ(の花)を折る云々となり、サクラの季節が終わつても後にゼンマイの花が控えているというように、四季折々の花を切れ目なく楽しむわが国の伝統的植物文化に則した奥行きのある解釈が可能となるのである。ここで留意すべきことはゼンマイの花すなわち胞子葉がサクラの花に対比すべき存在と認識されている点にある。ギンギシの果穂(花ではない!)はゼンマイの胞子葉によく似ており、とりわけ、熟したときはいずれも赤褐色に色

づくから、その感はいつそう強くなる(下段の写真)。すなわち、ギンギシの未熟果穂(おそらくこれを白い花としたと思われる)および成熟果穂も、ゼンマイと同様に、花と認識されていた可能性が高く、上中古代の歌人にとっては決して地味な存在ではなく、「いちじろく」、「名にし負ふ」として歌に詠むに価するものであったと推定されるのである。



以上述べたように、「いちし」の花は平安時代おそらく万葉時代においても決して地味な存在と思われていなかったことは明らかであり、「いちし」ギンギシ」説のほとんど唯一といえる弱点は克服されたといつてよい。しかしながら、「いちし」の花およびそれに似た「わらび」の花は室町時代以降の文字で登場することはなかった。すなわち人々の花に対する審美眼・価値観の変質とともに「いちし」や「わらび」は文学の表舞台から消え去ったことを意味する。日本の植物文化は時代とともに変遷しているのであり、このことは現代人の植物観だけに軸足を置いて古典文学の植物考証を行うことがいかに危険であるかを示唆し、かかる研究においては客観的なエビデンスからそれぞれの時代の植物観を抽出する必要があることを示している。